
中二病患者と同性愛

ポペ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

中二病患者と同性愛

【Nコード】

N5399M

【作者名】

ポペ

【あらすじ】

高3になって初めて告られた！でも、美少女じゃなくて美少年って！？これは俺と美少年のハチャメチャストーリー！！ B
L要素がほんの少し入っていますが基本的にはコメディーなので、そっちを期待している人にはもの足りないと思いますのであしからず。連載を再開しました。

第一話

さてさて、皆さんこんにちは。俺は山木司やまきつかさ通称部長。高校三年、囲碁部に所属していて、なりゆきで部長になり、なぜか囲碁部でない者まで俺を部長と呼ぶ。これはいじめか？ まあ、もう慣れたが……。さて、そんなことは置いて。いま俺は人生初めての告白をされているわけだが、まったくどうしたものか……。

ん？ 気取ってんじゃねーよって？ ふ〜。おそらく君は大きな誤解をしている。俺の「まったくどうしたものか……」は、「もてる男は大変だぜ」ではない。断じて違う。ではなにをそんなに困っているかというと、告白してきたのがなんと、なんと！ 我が学校でおそらく一番の美少年ではないかというほどの美少年なのだ。

理解できたかな？ 美少女ではなく美少年なのだ。

これは困ってもしょうがないでしょ？ 困らない男がいるならここ来て、変わってあげるから……マジで！

「あ〜」

おお〜と、回想という名の現実逃避は失敗か……。では次はどうしたものか？

「あ〜、それでお返事を聞かせてもらえませんか？」

ん〜、まじでどうしょ。普通なら断るんだけど、彼、自分の首にナイフ向けてくれてるんだよね。これ断ったら俺の首がやばいことになっちゃうそうだな〜。なにこの状況？ 選択肢ないじゃん。俺どうしたらいいの？ だれか〜。た〜す〜け〜て〜。

「やっぱり、僕のことを嫌いなんですか？」

ナイフが微妙にゆれている。……もしかして泣いてる？ この展開は……！

「ぐすん。あなたに愛されないなら……あなたを殺して僕も死にます」

やっぱりー！！ でました！ テンプレー！！ ちよつ、ナイフが皮膚に触れそうだよ、どうしょ！？ と、とりあえず話そう！ うん、それしかない！！

「ちよつ、ちよつと待ってっ！」

「……なん、ですか？」

やばい、ちよー怖い。美少年がナイフ持ってなんか、覚悟決めた目で俺を見てる……。

「お、俺さ。君のことよくしらないからさ、好きとか嫌いといえないうっていうか……」

ナイス！！ 俺！ おそらく最高のその場しのぎの言葉！！

美少年は……、なぜか目を輝かしていた。なぜ？

「そ、それじゃ僕のことをよく知ったら僕のことを愛してくれるんですね！？」

……は？ なにをどうとつたらそうなる？しかし、ここはそういうことにしとけば、おそらく当分の間は命は安全だろう……。

「ああ、俺が君のことを好きになるかどうかは知らないがな……」

ダメだ、聞いてない。はじめの「ああ、」しか聞いてない……。おそらく彼はいまどこかのお花畑にいつてるのだろう。いまのうちに逃げるか……。

その日の夜、俺の携帯にくるはずのないものがきているのに気づいてしまった……。それは、あの美少年から彼のプロフィールが永遠と書かれていたものだった。

い、急いで着拒しなくては……！

ふー、これで一安心。てか、彼後輩だったんだ。どうりでみたことがなかったんだな。てか、なんで彼が俺のメアド知ってるんだ？ま、まーいいだろ。あまりよくないけどな。

彼から送られたメールによると、名前は、河浦隆一郎、かわらしむしろういちろう高校二年生。……とてもゲイだと思えない立派な名前だ。本人はあまり好きではないらしい。

てか、もう寝よ。疲れた。明日起きたら夢だったらいいのにな……。
ZZZ

翌朝、いつものように起きて学校に行く用意をし、最後に持ち物

のチエック。

ん、携帯に留守電が23件？ だれからだ？ しらない番号だし……。い、いやな予感がする。と、とりあえず最初の一件だけでもきいてみよう。

俺は携帯のボタンをおし耳によせた。次の瞬間俺の身体中の毛穴から汗がでるのを感じた。

あ、あれは夢じゃなかったんだ……。どうしよ。学校休もうかな……。いや、いつかは行かなきゃいけないんだから。いや、やっぱり今日はな……。いや、やっぱり……。

こんなことやってたら、お母様がとつと行けと言ってきたので、しぶしぶ行くことにした。

……メール無視、さらに着拒。なんか、また命の危機を感じるのは気のせいだよ。うん、きつとそうだよ。おっと、予鈴がなってる。急がないとな。

第二話

さてさて、俺はいま教室にきているのだがいろいろ変なことがおこっている。

俺が異変に気付いたのは下駄箱だ。俺の下駄箱は他のと同じようにほどよく汚れおり、まわりの風景と馴染んでいたのに、今朝来たときにはそんなどこにもある物ではなくなっていた……。そこにあったのは、高そうな銀の塗装がされており、さらに真ん中に大きくハートマークが描かれていたのだ。中を見てみると、俺が今まで使っていた上履きではなく、見た目こそ普通だが、ほのかに薔薇の匂いがしたり手触りがあきらかに違うことからこれも高級品だろう。

なんなんだこれは??

こんなことをするのはおれの知り合いにはいない。おそらく、というか十中八九昨日の彼だろう。彼金持ちなんだな、いいな。じやなくて、どうしよ、これ。バラの香りがする上履きなんか履く気になんない。体育館よしの靴を履くことにしよう。問題は、このど派手下駄箱だ。

キーンコーンカーンコーン

おっと、もうホームルームが始まるな。急がないと……。とりあ

「いいえ。全くありません」

「そう、か。よし、もういつていいぞ。そろそろ一時間目がはじまるだろうからな」

職員室を出て俺はひとまず下駄箱に行きあのど派手なハートマークを教室から持ってきたガムテープで隠すことにした。

「よし、これで見えないな!!」

ふと後ろに気配を感じて振り返ると

「な、なんで隠しちゃうんですか!？」

うお!! 昨日の彼がいたよ、確か川浦君。

「えっと、これ君がやったの?教室の俺の机も」

「はい!! 気に入ってもらえなかったようですが……」

当たり前だ。どこ世界にこんな恥ずかしいものを好きになれる奴がいるんだ!!

「んとね。俺はこういうのしてもらうのはつきり言って嫌だな。あと、俺の携帯の番号とメールアドレスどうやってしまったの?」

「そう、ですか……。携帯の番号とかは先輩のお友達から買いました」

「ちょっとまで。買った!? 誰から?」

「えっと、田沼さんとかいったかな。短髪で色白の。」

「そうか、あいつか……。殺す！」

「そうか……。もうこういうことはやめろ。あと俺の携帯の番号は消せ。いますぐにだ!」

「は、はい!」

俺の口調が変わったことに驚いたようで、てきぱき携帯を取り出し俺の番号を消した。よしこれで携帯への被害はなくなるな。

「あと、この下駄箱と机、明日までもとに直しとけ。あと上履きはどうした?」

「う、上履きは……」

「捨てたのか? ならしょうがないか……」

「す、捨てません! 僕の家でちゃんと保管してあります!」

「……いまなんて? 保管してある? ええええ!! ストーカーじゃん!! もうやってることも言ってることもストーカーだよ。気づいてるのかな……? 一応聞いとくか。」

「あのさ、君のやってることってストーカーだよ?」

……固まってるよ。絶対気づいてなかったな。

「ふう。もう過ぎたことはいいけどもう同じことはしないでね。じゃね」

そういつて固まっている彼を置いて教室に向かった。さあ、次はお前だ田沼くく……！！

教室に行くと俺の机に田沼がいた。

「おい、田沼……！ てめーナニ勝手に人の携帯の番号売ってんだよ……！」

「お、もてもての山木君じゃないか。お前の携帯の番号を買う奴は結構いるんだぜ。そんなのいちいち覚えてらんねーよ。」

「な、なに……！！ 他にも買った奴がいたのか……！ 誰だ……！ 全員教える……！」

「はいはい、えっとこれだこれ。このリストに載ってるのが買った奴。ほとんど無害な奴だから気にするな」

「そついう問題じゃないだろ……」

コイツは田沼ためまかずと和人通称変態。趣味は盗撮。こいつの携帯とパソコンにはこの学校のほぼ全員のデータが入ってる。その情報欲しさに寄ってくる奴が結構いたりするらしい。

「おい、おまえ今とっても失礼なこと考えていただろ」

「い、いやそんなことないアルヨ」

「棒読みになってるぞ……」

「ま、ま〜いいじゃないか。ところで河浦隆一郎って奴のデータ持ってるか？」

「おまえが人の情報ほしがるなんて珍しいな。いつもガンダム、銃後はAVぐらいしか頼まないのに」

「う、うるせーな。人を中二病患者みたいに言うなよ」

「実際そうだろ。おっと、授業が始まるな。河浦隆一郎な、わかった調べてみるよ。2000円だ」

「俺から金とんのかよ!？」

「当たり前えだ。これはビジネス」

「くそっ！ 金の亡者め!！」

「なんともいえ」

第三話

さてさて、なんの面白みもない授業がやっと終わり、田沼のところに調べてもったことを聞きに行こうとしたところを

「山木先輩！ ちょっと来てください！！」

とか言っつて俺をどこかに連れて行くこととする見知らぬ二年生の女の子。だれ？ 誰ですか、この子は！？ よし！！ 勇気を出して聞いてみよう！！

「あの～、貴方はどちら様でしょうか？」

「そんなのどうでもいいでしょ！！ さっさと来なさいよ！！」

あの～、俺先輩ですよ？ そんな言い方ないんじゃないのかな？？ そうだよな、俺間違っつてないよね？？

「あの～、たびたび申し訳ないんですけど、どこに向かっているんでしょうか？？」

「んも～、さっきからうつさいわね！！少しは黙ってらんないの！？ べらべら喋る男は嫌われるわよ！！」

「………すみません」

なにこの状況。意味わからん。

来たところは三階の二年三組だ。囲碁部に二年生の後輩は数人いるが、二年三組にはいないはずだが……。話しかけるとまた怒られそうだし……。

「じいよ」

お、話しかけてくれた。よし、質問するぞ!!

「あの「さっさつと入るわよ!」……」

無理だ、諦めよう。この子にはどうやっても話しかけることは出来ないよいうだ。

「あそこを見て」

「あ、あれは! ごめん、帰らせてもらいます!」

指を指されたところを見ると、「山木先輩に、山木先輩に」と繰り返すあの変態美少年がいた。あれは関わってはいけない雰囲気を出している。へたしたらまたナイフ向けられるかもしれない。もうあれはこりこりだ……。

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ!」

無視だ、無視。こればかりは無視させて貰う。俺はもう彼に関わりたくない。俺の全てが彼に関わるのを拒否している。

だいたい、今考えてみたら彼は明らかにおかしいだろ!? 人にナイフを向けるし、男に告白するなんて! 一般常識ないのか!? 彼の親はなにを教えてきたんだ? 彼に一般教育をしてこなかつ

たのか？ いや、親がしなくても普通、幼稚園とか小学校で一般常識を教えるだろ！？ 彼は幼稚園にも小学校にも行ってないのか？ 今の日本に小学校にすら行かないで高校に来れる奴はいないだろ！！ 奴は裏口入学でもしたのか！？ だんだん、いらいらしてきた！！

「悪いけど！ 俺、彼には関わりたくないから！！」

「河浦君は絶対あんなのことで悩んでるのよ！？ それにも関わらずあんなは川浦君に関わりたくないですって！？ ふざけんじやないわよ！！」

「確かに君の言うことは一理あるかも知れないが、君は俺と彼の間でなにがあつたのが知ってるのか？ 彼が俺になにをしたのか知ってるのか！？」

「そ、それは……」

「……悪いけど帰らせてもらう。あと、口のきき方に気をつけな！！」

そういつて俺は自分のクラスのある一階に向かった。

うっん、俺カッコいい！ほればれしちゃう！！

おっと、着いた着いた。さてと、田沼に聞きそびれた河浦の情報を聞くか。

「おい、田沼。奴のこと調べといてくれたん？」

「おお、部長か。おまえ口調が戻ってるぞ」

「ん、ああ」

「調べといたぞ。ここに書き写しといたから」

「ん、ありだと」

口調が戻ってたか……。どうしてもいらすると戻っちまう。

「おまえさ、いい加減その口調なおさないといつかばれるぞ？ おまえがチュウワの山木って呼ばれていたの」

「おい、その中二名をいうな」

「中二ワールドの山木がどうやって和銅中の山木に誤変換されたんだか……」

「クソっ！！ いいじゃないかよ！ 和銅中の山木で！！ だいたい中二ワールドの山木ってなんだよ！？」

「そりゃ、あのふざけた口調とふざけたファッションで秋葉歩いているオタクが、からんできた不良の喧嘩を全て買って、しかも負けたことがないとなれば有名にならないわけないだろう」

「……もういい。ちょっと黙れ、これに目を通すから」

な、なんなんだこれは！？ ありえない！！ こんなことが現実

に起こりえるのか？　つか、俺ただけ運が悪いんだよ！！

「おい！　これホントに事実か！？　ありえないだろ！！」

　　つつい大声で言ってしまったがこれは仕方がない。田沼から渡された紙にはこう書いてあったのだ。

河浦隆一郎、高校二年生。実家はヤのつく家業の社長さん。生まれてからずっと家で育てられており、10歳まで家から出たことがなく幼稚園、小中学校には行かず家で家庭教師を雇っていた。しかし、社長（隆一郎の父親）の意向で高校にだけは普通に通わせることにした。つまり、裏口入学をしたことになる。ちなみに五千万円で。入学した当時から異性からの人気はもちろん、男子からも圧倒的な支持を得ておりその人気は今現在も続いている。もちろん彼の家のことを知っている者はいない。現在彼女はいない、と。

「ああ、もちろん本当だ。俺の情報力をなめるなよ？」

「もう一つ。この情報を他の奴に渡したことは？」

「もちろんない。俺は他人の評価にマイナスになるような情報は渡さない主義だからな」

「でも、俺にわたしてるじゃん」

「それはあれだ。おまえが他人に情報を教えるとは思わないからだ。ま〜、ある意味おまえのことを信用してるんだよ、俺は」

「そう、か」

しかしどうしたもののか。本当にあいつが裏口入学したとは……。いやいやそんなことよりや○ざの家の子だったとは。どうしよ、もし彼のパピーがでてきたら俺瞬殺じゃねえ!? どうしよ、ドウシヨ、同志よ助けてくれ!!! じゃなくてマジでどうしよ……。

「あと、わかればでいいけどさっきうちのクラスにきて俺を連れてった女のことわかるか?」

「ああ、彼女か。彼女のことならすぐかるぞ。名前は確か「キーンコーンカーンコーン」おっと授業が始まるな、次の休みに教えるよ。料金は……、いいや。ただにしてやるよ」

「おう、よろしくな」

第四話

さてさて、なんの役に立つのか解らない授業が終わったことだし、田沼のところにあの女の子のことを聞きに行くことになりました。

「田沼、さっきの女の子のことおしえて〜」

「なんだ、そのまぬけな声は？」

「いや〜、授業があまりにもつまらなくて眠くて眠くて」

「寝てたじゃねーかよ。つーか、眠くても普通の奴はそんな声にはならないぞ?」

「うるへー! 俺はなっちゃうの!!--」

「中二病患者の症状の一つなのか? 実に興味深い……」

「……もういい。とっとおしえろ!!--」

「はいはい。いま教えるよ」

「おう、早くしゃがれ!--」

「……なんでそんなに偉そうにできるんだ? まあいい、彼女の名前は田中裕子^{たなかゆこ}。高校二年生。ついでに言つたら河浦隆一郎と同じクラス。

彼女の親は普通の会社員と普通の専業主婦。兄弟は妹が一人。

中学校は俺らと同じ和銅中学校、おまえがチュウワの山木って呼ばれていたのは知っているがおまえのことはよく知らないらしい。というか、彼女は興味のないものにはまったく興味を示さないし、知ろつともしない極端な性格。他に聞きたいことは？」

「田中さんとやらは河浦君のことが好きなのか？」

「そつだ。誰にもいうなよ？ 他は？」

「最後に、どうやってそんな情報を手に入れてるんだ？」

「企業秘密。強いていうなら地道な努力だな」

「嘘つけ。まあいいや」

今日はおそらく河浦君も大人しくするだろうし、田中さんも俺のところに来ることはないだろう。

明日は……考えるのはよそつ。どうせろくなことにならないのは決定してるんだろつな。……はあ、なぜ俺がこんな目に。

今日は予想通りなにもなく無事終わった。よかつた~~~~!!

「山木先輩に、山木先輩に、」

僕はさっきからこの言葉をくりかえしている。なにがいけなかったんだ？　なんで山木先輩は怒っていたんだ？　なぜ？　なぜ？　なぜ？　僕のやったことに何の間違いはなかったはずだ。じゃあ、なぜ山木先輩は怒ってたんだ？　わからない……。

……今日はもう帰ろう。

怒った理由がわからないまま先輩に会ったらどんな顔をしてしまうか。

仮病を使い早退し、今いえにいる。父さんはいま出ているようぞ

家にいない。いましかない……。

僕は自分の部屋にいき、ペンを持ち紙に文章を書き連ねた。

書き終わり僕は覚悟を決め、手にナイフを持ち立ち上がった。

山木先輩に嫌われた僕は生きる意味なんてない……。いや、あるかもしれないが恐らくそれでは僕は納得できないだろう。それじゃ、ダメだ。僕は山木先輩に認められることで生きる理由ができ、山木先輩を愛することで生きる意味を見だし、山木先輩に愛されることで生きる希望ができるのに山木先輩に嫌われては僕は生きることを許してもらえない。

それならば……

僕は部屋の中心に立ち自分の手首を……切った。その瞬間僕は意識を手放した。

「……」

「生きて、いるのか……」

……。

なんで、なんで僕は生きてるんだ？ たしかに僕は自分の手首を切ったはずだ。

そもそも、ここはどこだ？ しらない天井にしらない壁。どこだここは？

ドアを叩く音が部屋に鳴り響き部屋のドアが開いた。入ってきたのはいかにも医者らしい格好をした男。僕はこの男は知っている。この男は小須田愁作こすだしゅうさく。僕の父さんのお気に入りこころの闇医者だ。医師免許は持っていないでもそこらの医者よりも腕がいらしい。あと免許を持っていないところも父さんが気に入っている理由の一つだ。なんともくだらない……。

「どうして小須田先生が？ 僕はどうしてここに？」

「どうしても何も、隆一郎君が部屋で腕から血を流して倒れていたって君のお父さんが血相を変えて家に来たんだよ。いや〜、よかった。君が万が一目を覚まさなかったら僕が君のお父さんに殺されちゃうからね。ははは」

「そうか、そういえばそうだったな……」

「そうそう、君の腕だけどみたためやばそうだったけど実際そこまでひどい怪我じゃなかったんだよ。薄皮一枚きれてただけでそんなに重症じゃないから一週間ですれば包帯もとれるだろう」

「そう、ですか……」

結局死ねなかった。薄皮一枚か……。勇気がたりなかったのか……。

第五話

さてさて、またもや俺、山木司は命の危機にさらされている。この前と違うのは今回は美少年がナイフではなく、美形のおじさまが（かなりの値が張りそうな）日本刀を俺の首に向けていることだ。ついでに言うと俺の後ろ、つまり出口の方にはハゲじゃなくて、いかしたスキンヘッドで顔がいかつい男たちがいたりする。

なんでこんなことになったのでしょうか？ 理由は簡単。いつもと同じように学校に向かっていたときに黒塗りの趣味の悪いベンツが俺の目の前にとまり、マッチョの男が俺に車に乗れと言ってきた。いくら俺が喧嘩が強いといっても高校生相手ならではの話。こないかつい顔とは喧嘩で勝てる気がしない。で、連れて来られたところがここ。

「おまえが山木司か？」

おおくと、またもや回想というなの現実逃避は失敗だ。

「え〜と、そうですけど……」

「そう、か……。とりあえずこれを読め」

渡されたのはどこにでも売っているB5のルーズリーフ。

「なんだよ、これ！」

渡された紙にはとんでもないことが書かれていた。

遺書

僕は山木司先輩に嫌われてしまった以上生きていく自信がない、それならばいっそ僕は自分の命を絶つことを選ぶ。

さようなら、みんな

いまままでありがとう

え〜と、いまわかったことその一。俺の目の前にいる美形のおじ様は川浦君のお父さんだろう。その二、川浦君がえつと、自殺、したっばい。

「え〜と、失礼しました。いま俺が思ったことを言ってもいいですか？」

「ああ」

「あなたは川浦君、えつと、隆一郎君のお父さんで、隆一郎君は俺のせいで自殺をした……。で、間違ってますね？」

「ああ、そのとおりだ。シャーロック・ホームズもびっくりの名推理だ」

「……ふざけないでください。自分のせいで人が死んでしまったんだ。笑えるわけない……」

「おいおい。なにを勘違いしてるんだ？ 隆一郎は死んじやいないぞ、出血はひどかったが命に別状はないようだ」

「なら、なんで息子のところに行かないで俺をここに呼んだんですか!？」

「そう怒るな。愚息じゃなくて、息子がいないときにおまえと話をしておきたくてな」

「……話? ま、まさか俺のせいで河浦君が自殺したから責任とって死ぬ、とか言わないよね!? い〜や〜だ〜!!! 誰か、誰か助け〜〜!!!」

「おい、大丈夫か? 顔色がいきなり悪くなったぞ?」

「……話って責任とってし、死ぬとか言いませんよね?」

自然と声が震えてしまう。なんだかんだ言っても俺はまだ18の子供だ。いきなりや〇ざの家に呼ばれ、しかもそのや〇ざの息子が自殺した理由が家にいるんだからこれぐらいありえそうでこわい。

「んなこと言わねえよ。ただ、おまえとあいつの関係を包み隠さずに話せばなんもしねえよ。ただ……嘘ついたら、殺す!」

や、ヤバイ。ちよっと、ちびっちゃんだった……。だ、大丈夫ズボンは濡れてないな、よかつた〜。……じゃなくて!! さっさと話して帰らしてもらおう。俺はなんにも悪くない……はず。でもその前に「えっと、話す前に二つお願いがあります」

「なんだ、言ってみろ」

「では、まず一つ目、俺の首に向けている日本刀をおろすこと。次

に、後ろにいるいかつい顔じゃなくて、かっこいいお兄さん達に部屋から出てもらうことです」

「……一つ目はいいが二つ目はだめだ。それともそれなりの理由があるのか？」

「……理由は、隆一郎君の名誉に関わる話が少々入っているからです」

「……いいだろう。おまえら部屋から出る」

いかつい顔の男達は立ち上がりしぶしぶ部屋から出ていった。ふう、これでちょっと安心。

「どこから話せばいいのか……。一応、俺と隆一郎君が初めて話したところからはじめます」

俺は河浦君が、俺にナイフを向けながら愛の告白したこと、次の日学校の俺の下駄箱、机が改造されていたこと、それを見た俺が河浦君に厳しい口調で注意したことを話した。

「やはりそんなことがあったのだ……。俺の馬鹿息子が迷惑をかけた、すまなかった」

意外。それが今の俺の感想だ。まさかや○ざの頭に謝られるとは想像もしなかった。

「フフ、まさか全く嘘をつかないで話すとはな」

……は？ いまなんと？ あなたは人の心の中を読めたりする変

態さんですか？ てなわけはないはずだ。

「いまの発言は全て知っていたうえで、俺に話させたってことですね。つまり、俺のことを試したってことですね？」

「フフ、まったくよく頭が回るやつだ。その通りだ。おい、入ってこい」

その声とともに入ってきたのはよく知った顔だった。短髪で銀色というふざけた髪の色、そしてそこそこのイケメン。田沼和人、通称変態。なぜ、おまえがここにいるんだ？ まー、ようするに河浦父はこいつから情報を買ったってことだな……。

「なるほどあなたはこいつから情報を買ったんですね」

「そのとおりだ。さすが平成のシャーロック・ホームズ。いくつか付け足すところがあるがな」

「補足ですか……。それは、あなたがこいつに資金と学校の生徒の個人情報を与えて、そこからこいつが独自のネットワークで深く調べていったってことですか？」

「……ほお。そこまでわかっていたのか」

「なんとなくですよ。こいつがいくら優れた情報屋だとしてもこいつはまだ高校生、なのにありえないほどの量の情報を知っている。それは強力なバックアップがあるからだと考えるのが妥当でしょう」

「……すごいな。高校生でここまで頭が切れるとはびっくりだな。それに聞いた話だと喧嘩も強いようじゃないか」

「……俺はこれで帰ってもいいですか？」

「フフ、いいだろう。田沼も帰っていいぞ」

帰り道は田沼が知っていたので歩いて帰ることになった。

「で、なんでおまえがや○ざの情報屋なんてやってるんだ？」

「企業秘密」

「だろうな。つま、でもおまえの情報源の一つがわかったからよしとするよ」

「ははは、あそこの親爺さんは少々親ばかだからなWWW」

そんなこんなで今日の俺の一日は終わった。

学校？ サボりましたけどなにか？？

第六話

さてさて、俺は今河浦君が入院しているという病院（？）にきている。……これって病院いえるのか？

田沼に河浦君が入院している病院を聞いて来たところはすこし大きな地震があつたらもの見事に崩れ落ちそうなほどぼろい建物、しかも看板には「WELCOME TO RIO'S HOTEL」と書かれている。……RIOってあの有名なA〇女優のRIOさんですか！？

ま、まあそんなことはどうでもいいが。……やっぱりちょっと気になる。考えても答えはでないからとりあえず入るか。未成年には刺激が強すぎるお店だつたらどうしよう……。……。

とりあえず入ることにしよう。

入っていきなり犯されじゃなくて、襲われることはないだろ。

ドアを開けるとそこにはテレビドラマでよく見るカウンターがあったが、誰もいないので勝手に上にながらせてもらった。適当に部屋を覗いてみるとベッドと簡易冷蔵庫があつた。さらに床にはおそらく使い終わったゴムが落ちていたりする。なんも見えないよ、俺は。

しばらく進んでいくと明らかに他の階とは違うところに来た。どのように違うかと言うと明らかに病院のにおいがし、さらに部屋を覗いてみると他の階にあつた回りそうなベッドではなく普通の病院にある普通のベッドに変わっていたのだ。

しばらく歩くと人の声が聞こえてきた。

その部屋に入ることしよう。……怒られたりしないよね、勝手に入ってきたからって。

「しつれいしま〜す」

一応そついいドアを開けるとそこには、ベッドで寝ている川浦君と白衣を着た怪しすぎる男が立っていた。

「君は？」

白衣を着た男が聞いてきた。

「えっと、俺は川浦君の……、一応友達です」

「なるほど、君が山木君か」

「はあ、そうですね……」

「ふふ、それじゃあ俺は出て行くことにしよう。隆一郎君、あまりはしゃいじゃいけないよ」

「わかってますよ、小須田先生」

そんなやり取りのあと、白衣の男は部屋から出て行った。

「え〜と、元気？」

「え、は、はい！ 元気です」

「え〜と、河浦君がその、自殺、しようとしたって聞いたからさ」

「……もう聞いたんですか」

「えっと、まあ、いろいろあつてね。それでなんでこんなことを？」

「……山木先輩に嫌われたから。それだったら……」

「死んだほうがいいと」

「……そう、です」

「はあ、なんでそうなるのかな。しかも遺書なんて書いて……。さらにそこに俺の名前を書くなんて……」

「み、見たんですか！？なんで知ってんですか？」

「……まあ、なんだその、元気そうでよかったよ。それじゃあ俺はもう行くよ」

そう言って俺は病院を出た。しかし俺はまだ病院の前にいる。なぜ？理由は簡単。またまた黒塗りの趣味の悪いベンツが俺の前に止まっちゃったりしてるんですね。これはあれですね、完璧に昨日行った家の人が乗っているはずだよな。

……やっぱり降りてきたのは昨日俺の首に日本刀を向けていた河

浦父と秘書らしい中年のおじさま。これまた美形。なんだ？ 川浦家のトップはみんな美形で固めているのか？ それとも俺に対する嫌味か？

「どうも。これから隆一郎君に会いに？」

「ああ、そうだ。まだ、意識を戻してから会ってないからな。おまえはもう会ったのか？」

「ええ、今会ってきたのでこれから帰るところです」

「そうか、それじゃあな」

「はい」

はあ、緊張した。運がないな俺。いつの間に不幸体質になっちまったんだ？ まあ、いいや。帰ってガンダムのゲームでもしよ。

第七話

さてさて、俺は二日ぶりに学校に来んだがいつの間にか下駄箱も机も元に戻っていた。まあ、一日であんな変なのに改造できたんだから、二日あれば戻せるよな、ふつう。

しかし、下駄箱にはあの高級感あふれる上履きしかなかったのでしたなくそれを履いている。うん、普通の上履きとぜんぜん違うね。なにがどう違うのかって聞かれるとうまく答えられないがとにかく違う。

実をいうと俺は、昨日から嫌な予感がしている。今日学校でなにかおこる、そんな気がしてならなかった……。そしてそれは現実になった。つーか、いまなろうとしている。

いま俺は例の少女、田中裕子ちゃんに連れられて屋上に来ている。

「先輩！ 河浦君どうしたんですか!？」

やっぱり彼の話が。

「なんで俺にそんなことを聞く？ そんなの担任に聞けばいいだろう？」

「聞いたら知らないって、いわれました!」

「なんで担任が知らないことを俺が知ってると思うんだ？」

「だって先輩は河浦君の友達でしょ？ それに二日間学校休んでだし、先輩の友達が先輩なら知ってるかもしれないって言ってましたもん!」

俺の友達？ ……百パーあいつだな。

殺す！

「さあ、俺は知らないけどね。そんなに知りたいたいんなら……」

そついいながら俺は彼女を壁に追い詰め、両手を押さえた。

「それなりのことしてくれるんだよね？」

自分でやっていて思う。最低だ、いま俺がやっていることは。

「や、やだ！ 離してください！！」

必死に俺の手を振り払おうとしたが意味をなさない。女の彼女の力では男の俺の腕力にはかなわない。あたりまえだ。

「ここには誰もこない。力では俺のほうがつえ、さあどつする？
今ならまだ帰してやってもいいが今後川浦君のことで俺に近づかないことを約束しろ」

わざと顔を近づかせ、吐く息が彼女の顔に当たるように話した。
彼女の顔が少し赤くなるのが解かった。正直俺も恥ずかしい……。
しかしもう後戻りはできない。

「さあ、どつする？」

同じ言葉を繰り返す。

「……わ、わかりました」

ほっ、よかった。これで田中さんのことでびくびくしないですむ。俺は手を離し、彼女を自由にさせた。手を離れた瞬間俺の頬に痛みが走ると同時に大きな音がなった。

理由は簡単、ビンタ。田中さんのビンタが俺の頬に命中。はつきり言っただけ人生の中で一番の痛みだった。いろんな意味で。

「最低！ もうあなたとなんて話したくない！！」

そう吐き捨てる彼女が屋上をでて行った。……当然っちゃ当然の報いか。

しかしなんで俺はあんなことをしたんだ？ いくら彼女に腹を立てたからってあんなこと普通はしないはずだ。じゃあなんで？ 考えれば考えるほどわからない。彼女のことかと思いつくのは、アジア人の特徴である黒い眼とショート黒い髪。薄化粧がしてある小さな顔。はつきり言って普通の何処にでもいそうな女の子。すこし違うのは少々、いやかなり胸がかいことぐらいだ。

……俺は彼女のことを好きなのか？ いや、それはないな。だって俺は彼女が川浦君のこと好きって知ってるし。じゃあ本当になんであんなことをしたんだ、俺は？

第八話

さてさて、田中さんとのいざこざとつまらない授業が終わり放課後。俺は田中さんにへんな情報を与えたバカのもとに来ているのだ。

「な〜に変なことを田中さんに教えてんだ!!」

「変なこと？ 教えたことは事実のはずだがな」

「うるせー！ 俺が言ってるのは教えたらどうなるのかなんて簡単にわかるだろってことだよ!!」

「ああ、そういうことか。金さえ払えばだいたいのは教えるぞ、俺は」

「おまつ、彼女から金取ったのかよ!？」

な、なんて奴だ……。いや、これが奴か。金の亡者め！ しかし

……

「とつた金よこせ」

「なんでだYO!？」

「いいからYO・KO・SEE!!」

なんかお互い語尾が変になっているのは気にしない気にしない。

「おまえ、田中裕子に惚れてるのか？」

「……はっ？」

「いや、だっておまえが人のことでこんなにムキになんの初めて見たからさ」

「……。いいからよこせ!!」

受け取った額はたったの五百円。……どんだれ俺の価値低いんだよ。まあいいか。

田中さんのクラスに行くときまだ帰りのホームルーム中らしく先生がクラスに向かって怒鳴っていた。……怒鳴る必要なくね？

ホームルームが終わり先生がでていくのを確認してから教室に入った。そして俺は見たくないものを見た。

河浦君のほうを見て、「なんであんなイケメンが自殺なんてしようとしたんだよ？」 「イケメンの考えることなんて俺らにはわかんなーよ」といいながら笑う男子生徒A君とB君。他にも河浦君の腕を見ながらひそひそ話す奴らが多々いた。

河浦君はとうとう一人たんと帰りの準備をしていた。べつにどうってことないような感じだったが俺には彼がいまにも泣き出してしまいそうに見えた。

気付いたときにはもう河浦君の手をとり、屋上に向かい歩いていった。

「なあ、なんであんなに言われてたのになんも言わないんだよ!？」

怒鳴るつもりはなかったのに勢いあまって怒鳴っていた。
川浦君はなんか困ったけど嬉しいそうな顔をしていた。

「なんか言えよ！」

なんか見方によっちゃ俺が彼をいじめてるみたいだな……。まあ、誰も来ないと思うからいい「バン！」……。人来ましたね。それも般若のような形相で。

「ちよつと、なにやってんのよ!？」

はい、田中さんです。朝、結んだ約束を破りましたね。いや、これはぎりぎりセーフなのか？

いまちよつと会いたくないんだよね彼女とは。俺の気持ちがよくわからないから……。

しかし、そんな俺の気持ちはよそに話は進む。

「ちよつと先輩！ 河浦君から手を離してください!!」

ん？ 手？ 見てみると俺は彼の肩を壁に押し付けていた。……いつの間に。

「すまん」

「いえ。それよりもなぜ山木先輩が僕のクラスに？」

「ああ、それは……」

すっかり忘れてた。

ポツケに手を入れて五百円玉を取り出し田中さんに手渡した。

「約束をもう一つ加えさせてもらおう。もう二度と田沼から情報を買
うな！ あいつと話す分には問題はないがな」

そついい終わると彼女はただただコクコクと頷いていた。
……そんなに俺怖いか？

かるく傷つくな……。俺のガラスのハートが……。
ガラスは熱すればくっつくとか言わないよ、その君！

「で、河浦君。なんでなんも言い返さなかったんだ？」

「そ、それは……」

田中さんのほうをちらりと見る。

ああ、彼女がいると言いにくい……。

「田中さん、悪いけど帰ってくれない？」

「い、嫌です！ 私は川浦君の力になりたいんです！！」

ああ、そうか。やっと解かった。

俺は彼女のことを好きなんじゃなくて彼女のことを羨ましいんだ
な。自分の思ったことを……。好きなことをはっきり言える彼女
が。

そんな彼女のことをまぶしくてたまんなかったんだな、きつと……。
俺にはどうやってもできないことをやすやすとやってのける彼
女のことが羨ましくて、憎くてたまらないんだな……。

「……そうか。俺は邪魔みたいだな。すまなかったな。あとは二人で話してくれ」

そう、これでいいんだ。田中さんは川浦君のことが好きだし、そんな田中さんに接していれば川浦君も彼女のことを好きになるかもしれない。

そう、これでいいはずだ。でも、なんだろう。すごく胸のあたりがすごく変な感じがするのは気のせいだろうか……。

第九話

山木先輩がいなくなっただけからだいぶ時間が経った。約二十分ぐらい。

……気まずい。どうしようもないくらい気まずい。田中さんは黙ってこつちを見ているだけだし……。

「あ、あの！ 川浦君……！」

「うわ！ びつくりしたー！！」

「な、なに？」

「あの、その、な、なんでその、自殺………なんてしたの？」

……やっぱりその話か。話したくないんだけどな。

僕の評価がどんなに低くなるうがかわらない。ただ、ただ僕のせいで山木先輩の評価が下がるのは許せない。

「……ごめん。言えない」

「な、なんで？ なんで山木先輩には教えたのに私には教えてくれないの!？」

「……僕は先輩に教えてないよ」

「じゃ、じゃあなんで山木先輩は知ってるんですか!？」

「……ごめん、僕には答えられないよ」

彼女の顔が僕に近づく。

彼女の息が僕に、僕の息が彼女にかかる距離まで近づいた。

彼女が一気に距離を縮める。

彼女の唇が僕の唇を塞ぐ。

「ん、あっ」

彼女の舌が僕の口に入ってくる。

僕の口の中を生き物のよつに動き回る。

「ん、……ああっ！……っ！……」

自然と僕と彼女の喘ぎ声が響く。

「っ！ 駄目だよ、こんなの！！」

彼女の肩をつかみ、押しは離す。

「んっ！ なんで！？ 私じゃ駄目なの！？ やっぱり……山木先輩のことが好きなの！？」

「！！ な、なんでそのことを！？」

「……やっぱりそうだったのね」

な、なんでわかったんだ？

沈黙をYesと取ったらしく

「なんで、なんで山木先輩なの！？ なんで私じゃないの！？」

こらえきれず涙を流しながら続ける。

「お、おかしいよ、川浦君。あなた男の子なのよ!? 山木先輩も男なのよ!? 異常よ!!! 男同士なんてっ!!!」

「……わかってるよ、自分でも。でも、駄目なんだよ……。いつもふと思うと山木先輩のことを考えてしまうんだよ。何回も、何回も女の子のことを好きになろうとしたよ!でも、駄目なんだよ……。どうやって、どんなに思い込もうとしてもやっぱり最後には、山木先輩が僕の頭を埋め尽くされてしまうんだ!」

「河浦君……、なんで?なんで、山木先輩なの!?!」

「あれは、春休みだった。僕がずつと行ってみたかったアキバにいったんだ。そこで運悪く不良に絡まれてね。もちろん彼らを撃退できるだけの力を僕はもっているよ、や○ざの息子だからね。で、も力をもっているよ。そのときは恐怖で足がすくんで立っているのがやっとだったんだ。そんなときだった。山木先輩が現れたのは。山木先輩は不良達を次々と倒していった。いまでもあのときの光景をはつきりと覚えてるよ。先輩は武術とは到底よべない動き、でも実に効率的な動きだった。たぶん、何回、何百回と喧嘩をしてあの型を生み出したんだろうな。僕の家若い衆じゃ絶対に勝てないとおもう。圧倒的な力で不良を倒して僕に言ったんだ。“大丈夫か? ケガない? あんまり人通りが少ないところを歩くなよ。ああいうバカがいるからな。” そのときに僕の体が電気が通ったように痺れたのがわかった。何日経っても助けてくれたその人が頭から離れなかった。その日から数日経った学校で見つけたんだ。そして瞬時に理解した。ああ、僕はこの人に恋をしたんだなって。僕のことを心配してくれる人はたくさんいる、でも皆僕を若頭として。はじめだった、僕を一人の、普通の一人の人間として心配してもらえたのが。そして、この前山木先輩に告白した。もちろん結果はダメだったよ。そのあと頑張って先輩に気に入られようといういろいろして

みたけど全て裏目にでただけ。それで……自殺を」

河浦君が話おわった。彼はとても懐かしそうな、でもどこが哀しそうな顔をしていた。

彼の話はどっかの小説かマンガで読んだことのあるないようだった。でも一つ気になる点がある。

「や、や○ざの息子？ か、河浦君が！？」

「ん？ ああ、言っただけ？」

知らなかった、彼がそんな家の息子だったなんて。

でも、でも私の気持ちはかわらない。いや、変えられない。たとえば、たとえ彼がや○ざの息子でも、彼が男の子のことが好きだったとしても……。

第十話

さてさて、俺、山木司は実はまだ屋上の扉の前にいたりする。

はつきり言ってもものすごく後悔している。

彼らが、というか田中さんが思いがけない行動に出たからだ。そう、キッスだ。それもただのキッスではなく、ディーブなやつをけっこう長い間。見てることちが恥ずかしくなる。

さらには、川浦君が話したこと。

過去に彼と俺が会ったことがあったなんて覚えていないんだよね。

つーか、俺けっこういろんな人を助けてるからいちいち覚えてら
んないんだよね。

てか、そんなことで俺に惚れたのかよ、彼は！？ そんなことで惚れられてるんじゃ、どんだけの人か俺に惚れてることになるんだ
よ！？

おかしすいううういいいいいいだろおおおおお！！

はあはあ、取り乱してしまった。

そ、それよりも、川浦君がや○ぎの息子だつてこと言っちゃたし
……。これって俺の責任になるのかな？ 間違っても田沼に知られ
るわけには……。

「よっ！ なんかいろいろと修羅場だな、おい」

はい、知られました。つーか、いつここに来たんだよ、こいつは！？

「……いつ来たんだよ、おまえは？」

「ん〜、初めっからいたぞ。あと、おまえやっとなんか自分の気持ちに気づいたんだな」

「ん、ああ。まあな。………！！ おまつ、なんでそのこと知ってんだよ！？」

「ん〜、なんでだろうね〜？」

「……まあいいか。こいつは変態だ、人の心を読んでもおかしくないよな……。」

「おっと、川浦君がこっちに来るぞ。どうする？」

「もちろん、逃げる！！ 行くぞ！！」

なんとか川浦君達には気づかれずに逃げることはできたが問題が一つ、逃げてきた先がなんか知らないが黒塗りの趣味の悪いベンツだったりするんだよねえ。ようするに川浦家の車だ。運転手はこの前見た執事ばついい人。

田沼はと言うと、執事（仮）と楽しく話してるし……。

数分してきたところはこの前とは違うところだ。

つーか、川浦君が入院してた病院（？）だ。この前と同じく看板には「WELCOME TO RIO'S HOTEL」と書かれて

いる。やっぱりRIOってあのAO女優のRIOなのかな？

「なあ、田沼。RIOってAO女優のRIO？」

「なんのことだ？ この元オーナーの奥さんの名前だぞ？ AO女優のRIOとは無関係だぞ」

「なんだ、ちょっと残念。
てか、なんでここにきたんだろ？」

「ほら、行くぞ」

「どこに？」

「中に決まってるんだろ。ほらさっさと来い」

中に入り上へ上がっていくとそこにはやはり小須田先生と河浦父がいた。

「おお、来たか。ん？ なんで山木まで来てるんだ？」

「え、ああ、なんていうか成り行きで……」

「まーいいか。それで田沼、なにか変わったことはあったか？」

なるほど、田沼が河浦父に定期報告的なもんをしているんだな。

……俺がいていいのか？

「ええ、一つだけ。今日あったことですか隆一郎君が同じクラスの女の子にや○ぎの息子だと言っことをばらしました」

「なに！ 本当か!？」

「ええ、部長も聞いています。そうだよな？」

ええ、俺に話を振るなよ。バカ!! めちゃくちゃこつち見えますがな!!

「まあ、なんていうか成り行き上聞いてしまいました。残念なことに……」

「そう、か。ついに知られてしまったのか……」

「ボス、その小娘消しますか？」

おおくと、後ろに控えてたいかつい男が物騒なことを言い始めましたよ。

「そんなことできるわけないだろ！ もっと考えてから言え!!」

さすが河浦父!

「金を用意しろ。一億ぐらいあれば何とかなるだろう」

ええー!! おかしいよ、それも!!

「失礼、部長がなにかいたな顔をしている」

おおー!! 俺はそんな顔をしていたか!?

「なんかいいたいことがあるのか？」

「……あの、俺が思うにそんなことをしなくても彼女は話さないと
思います」

言っちゃったー！！

「……田沼、おまえはどうおもう？」

「俺も彼女が人に話すとはおもわない」

「……、そうか。だが、確認はしてもらおうぞ」

「わかりました。俺と部長が責任もって確認します」

……はっ！？ いま、さりげなく俺も巻き込まれたよね？

「そうか。田沼、山木も頼むぞ」

もう決めたのね。いいよ、もう。

第十一話

さてさて、俺、田沼、田中さんは屋上に来ている。昨日の河浦父に言われたことを実行しているのだ。しかし、なんとというか意外なメンバーだな。

「で、なんのようですか？」

「え〜と、田沼が話があるみたいで」

よしっ！ 先手をうつたぞ！！ 偉いぞ、俺！！

「ああ、昨日隆一郎君から彼の家のことを聞いただろ？ そのことを他の人に教えないで欲しいのだが」

「ええ、私も誰にも言うつもりはないですからご心配なく」

「そうか。ありがとう」

「で、なんで先輩達がそんなことを私に言いにくるんですか？」

……もつともな意見だがどう答えればいいんだ？

「俺と隆一郎君は腹違いの義兄弟なんだ。兄が弟の身を心配するのは当然だろ？」

……えっ！？ 田沼と河浦君が義兄弟？

「……そう、ですか。わかりました」

「いやいや、絶対嘘でしょ！！　　どんだけ純粹なんだよ、この娘は！？」

「うん。あと隆一郎君は俺が義兄ってこと知らないからこれも秘密にしといてね」

田中さんは小さく頭を下げて屋上を出ていった。

「なあ、おまえ嘘ついたろ」

「ん、まあな。嘘も方便ってな」

「……な、なんていう屁理屈だ。」

「よし、これで言われたことやったから放課後、また親爺さんのところに行くぞ」

「ええー、俺も行くのー！？」

「あたりまえだ。行かないといろいろとめんどいことになるぞ？」

「例えば？」

「そうだな、いかしたスキンヘッドのお兄さん数人が襲ってくるとか？」

「……ありえそう。めちゃくちゃありえそう。」

「わ、わかったよ。いけばいいんだろ！？　　行けば！！」

放課後。昨日と同じように執事（仮）が向かえにきていた。

昨日と同じように無言で俺達を車に誘う。ただ一つ違うところは俺を助手席に田沼を後部座席に誘ったのだ。なぜ？ WHY？

「ときに山木さん。隆一郎様のことをどのようにお思いで？」

うおー！！ びっくり！！

「えーと、質問の意味がいまいち解らないのですが……」

この質問は、友達としてか、恋愛対象としてなのか……。まあ、後者ではな

「もちろん、恋愛対象としてです」

……まぢで？ え？ なに当り前みたいな顔してこっちをみてんの？ つーか前をみて運転しろ！！

「どうなんですか？」

口調は穏やかだけどオーラがありえないほど怖い……。変なこといたらこのまま海に行って沈められそう……。もちコンクリ抱かされながら。

「え〜と、それはあなたに言わなければいけないことですか？」

「……私は、河浦宗一郎様（カウラノシウイチロウ様）に仕えて約三十年になります」

え、なに？ 急に語りはじめたよ？

「出会いは簡単なものでした。私が親と喧嘩し、家をでて裏道で生活をしていました。その時宗一郎様が私の前を通り、私は愚かにも宗一郎様を脅迫しようとしました。しかし、私程度では宗一郎様に勝てるわけなく、あっという間に地面に倒れました」

……長いのかな、この話。

「そして宗一郎様が私にこういつてくれたのです。“よお、帰るとこねえんなら俺んどここねえか？”と。その言葉を聞いたとき私の体に電気がはしりました。そして私は悟ったのです。ああ、この人が私の救世主なんだと、私は一生この人についていくべきなんだと」

うん、ものすんごく長くなりそう。

「宗一郎様の奥様は体があまり強くなく、隆一郎様を生みすぐに亡くなられました。宗一郎様は組のことではなにかと忙しく隆一郎様のことをあまりかまってあげられませんでした。なので私が隆一郎様のお目付け役に選ばれ今まで面倒をみてきました。それが！ どの馬の骨かわからないやつを好きになった！？ ざけんじゃねー！」

ええー！ 口調かなり変わったよ！？ つーか、もー別人だよ！？

「お、オホン。失礼しました。つついテンションが上がると。」

「い、いえ」

「ようするに私は隆一郎様のことが心配でたまらないわけですよ。もし、もしまた隆一郎様が泣くようなことがあればそのときは……。まあ、もうそんなことはないですよ、山木さん？」

「こ、こえー!!」

そんなこんなで数分後、昨日とおなじ場所についた。
なかに入っていくと昨日とほぼ同じメンバー。小須田先生がいな
いだけであとは昨日とおなじだった。

第十二話

さてさて、俺以外の皆さんが真面目な顔になったところでお話スタート。

「さて、報告を聞かせてもらおうか」

「結果は普通にオーケー。言ったとおりだろ？ いい加減俺のこと信じろって」

「ふん！ おまえとつるんでいた、矢萩一家も轟一家も潰れたじゃねーか！ なのにおまえはパクられないのはなんでだ！？」

「そりゃ、親爺！ 両家ともほかの組に雇われてやったことだって知ってるだろ！？」

「ふん！ どうだかな！！」

な、なんていう黒い話をしているんだ！？ つーか、田沼ってまじで何者だよ！？

「それよりも山木！」

な、なに俺なんかやった！？

「高橋がおまえと戦ってみたいってよ。どうだ、戦って見ないか？」

「全力で断らせてもらいます！」

そもそも、高橋ってだーれ？

「そうか。ならもしおまえが勝ったらおまえの好きなものをなんでもくれてやる。これでどうだ？」

な、なんでも！？

「そ、それじゃあ、ガンダム〇〇の初回限定フィギュア全部でもいいでしょうか？」

「ん、ああ。それがなんなのかいまいち解らないがいいだろう、きつと」

やったー！　ずっと欲しかったんだよ！！

「あ、ありがとうございますー！」

「おいおい、そついつのは勝ってからにしろ」

はっ！？　……そつ言えばそんな話だったな。

「で、いつ戦るんだ？　べつに今からでもいいぞ？」

「あの、すごく今さらなんですけど高橋さんって誰ですか？」

「私です」

そつ言って一歩前に出てくる執事（仮）。

……え？　この人なん？　なんでこの人、俺と喧嘩したいん？

「え〜と、喧嘩する理由がまったく解らないんですけど……」

「理由は簡単です。あなたがどのくらい強いのか知るためです」

「なんのために？ と聞きたいけど、どうせ真面目な顔でとんでも発言するに決まっていますので諦めよう。」

「と言うのは建て前で本当はあなたのことを殴りたくて仕方ないんですよ。訳はわかってますよね？」

「うわ〜、ちょー爽やかなイケメンスマイルをみせながらなに言ってるん、この人は？」

「あ〜、今から辞退することはできますか？」

「してもいいが、高橋がいつ襲ってくるか分からないぞ？ 今なら殺されそうになっても止める奴がいるから今殴られといたほうがいいと思うぞ？」

……俺が負けるのは決定してるみたいなき言い方むかつく〜。

「いいでしょう。そのかわり約束おねがいしますよ」
ガンダム

「ほう、勝つもりか？ 面白い。安心しろ、約束は守るぞ」

ふん！ ガンダムのためにも勝たねば！！

田沼が賭けをはじめたのは見てみぬふりだ。あとで少しわけて貰おう、うん。

場所はかわって、人の気配がまったくしない公園。近くには建築物はあるが人がすんでいる気配はない。なにここの、なんでこんなところなの。

「ここはな、隆一郎が小さいときによく遊んだところなんだよ。改造されると嫌だからここら一帯全て買い取ったんだよ。まあ、人目を気にせず戦^やってくれ」

……親バカだ。はじめてみたよ。リアル親バカ、しかも河浦父はたぶんトップクラスだ。いうならばキングオブ親バカ！！

「そろそろ初めてよろしいですか？」

「え、ああ。いいですよ」

俺と高橋さんが公園の中心に立つ。身長は同じぐらいだが、腕の太さがぜんぜん違う。……一発いいの貰ったらおわりそう。

「これは、喧嘩ですから俺はせいじいことすると思いますけどいいですか？」

「かまいません。私はあなたをぶん殴ればいいですから」

……なんかここまで、はっきりいわれると清々しいな。あんま、いわれたくないけど……。まあいいか。

すうー

「いんぞー!」

第十二話（後書き）

誤字脱字、わからないところなどがありましたら教えて下さい。

感想、アドバイスなどもあったら教えて下さい。

第十三話

さてさて、高橋さんと喧嘩を始めて少し経つがお互いに一発も相手に当ててなかったりする。というか、お互いに一步も動いていない。

まったく隙がない……。こんなに隙がないのは奴は初めてだ。

「ふふふ、なかなかやりますね。こんなに若いのにこんなにできるとは……」

「そりゃ、どうも!!」

言い終わると同時に右ストレートをだす。

しかし、なんなくそれを左手で受け流し、右足で左頬を蹴り飛ばす。

「ぐおおっ!?!」

蹴られた衝撃で視界がかすむ。バランスをなくし千鳥足で後ろにさがる。口の中のどっかが切れ、口に血の味と匂いがひろがる。

痛っ! どんだけ体柔らかいんだよ!! 口の中が血でいっぱいだよ!!

「ぶっ」

一応血を吐き出すがすぐに血が口の中に溜まる。

「ほお、あれをくらっても立ちますか。まあ、まだ私はあなたをぶん殴ってないですから倒れられては困りますがね」

「ふん！ こつちもやられっぱなしで終わるつもりはねえよ！！」

今度は高橋さんから殴りかかってくる。

よし！ かかった！！

「ぶううっ！！」

口の中に溜めていた、血と唾の混ざったものを高橋さんの目に向けて吹き出す。

せこい？ 知るか！ 喧嘩ってのは勝ちやいんだよ！！

「う、うおオーー！！」

そりゃ、目に血と唾の混ざったものが入れば叫ぶよね。痛いだろうし、なによりも汚いしな。

「勝負ありですね」

「ま、まだだ！」

「もう終わりにしましょうや。俺は一方的に痛めつけることに快感を感じる変態じゃないんだよ」

はい、聞く耳なし。ものすごい大振りのパンチを何発もくりだす。もちろん、一発も当たらない。

「ハアハア、やっ少し見えるようになったぞ」

「止めるきはないんですね？」

「あたりまえだー!!」

ふう、それならば仕方ない。目が完全に見えるようになるまえにかたをつけるでしょう。

足に力を入れて一気に距離を詰める。

「はあああつ!!」

高橋さんの肩を掴み腹に膝蹴りをいれる。頭が下がったところをおもいつきりアツパー。

「ぐああつ!!」

……これで立たれたらお手上げだよ。

「ふう、俺の勝ちだ。いい加減負けを認めてくださいよ」

「ま、まだだあ……!!」

まちて？ 結構っていうか、本気で殴ったんだけど……。

鉄棒に掴まりながらなんとか立ち上がったが、脚は震えていて、鼻はあきらかに逝ってしまっている。

うん、イケメンがだいなしだな。ちよっぴりいい気分。

「いやいやいや。もう無理でしょ？ 自力で立ててないじゃん！」

「う、うるさい！ まだこっちにはこれがある！！」

そうやって服の中に手を突っ込み、黒い鉄の塊と一緒に手を外にだした。そう、不敵に輝く銃と一緒に。

「おいおい、これ喧嘩だろ？ んなもんだすなよ！」

はっきり言ってピンチですね…はい。まさか銃をだしてくるとは……。銃を持った奴と戦んのはこれで三回目だけどなんどやっても怖いな。

「ハアハア、死ねっ！！」

バ、バァン！！

銃声が響きわたる。

が、銃弾は虚しくも空を切るだけ。

俺は銃口と引き金をしつかりと見、引き金が引かれた瞬間に横に飛び避けた。

こんなことは、相手がさうとう混乱していて、動きが丸分かりのときしかできないので皆さんはやらないように！

「もうやめましょーや、まじで！ー！」

「うむ、この勝負は山木の勝ちだ。高橋、止めろ！」

さすが河浦父！！でも河浦父がそう言ってもまだ銃を俺に向け続けてるんだよねえ。おそらく聞こえていないのだろう……。……。

「ふう、どうしたものか……。おい、山木！お前がなんとかしろ！ー！」

ええー！な、なんで俺なの！？

「いやいや、ふつうに無理ですって！ー！」

「そっか、なら賞品はなしだぞ？」

「喜んでやらせてもらいます！」

とは言え、どうしたものか……。やっぱり気絶してもらっか。やはり、手段を選ぶ余裕はないな……。ねらいはあそこしかないな……。……。

足にまた力をいれる。相手の動きをしっかり見て、飛び出す。

「うおおおっ！ー！ー！」

高橋さんの中心より少し下、男の急所に足を振り上げた。

「ぐっ……、あああっ！ー！ー！」

わかる、わかるぞ。その声にもならない痛み！ しかしこれはやむを得ないことだ。しばらくは夜の戦闘に支障があるかもしれないが許してくれ……！

「すまない……」

そう言って高橋さんが持っていた銃を取り上げ河浦父に渡した。

第十三話（後書き）

誤字脱字、わからないところなどがありましたらお教えください。

感想、アドバイスなども待ってます。

第十四話

さてさて、高橋さんと喧嘩を通り越して死闘を繰り広げた翌日。本日は休日なのでオタクの聖地、アキ○バラにきている……はずだった。

うすうす気づいてはいたよ!? もう、俺にはプライベートというものがないということは! でも、でもね!! 朝、起きてもない俺を勝手に部屋から連れ去るのはいささかやりすぎではないでしょうか!? 僕は間違っているでしょうか!? 否、間違っているはずがない!!

しかし、そんなことをや○ざに言えるはずがない。ああ、俺の人生どうなってしまうんだ……。

「おい、山木。昨日の賞品についてだが」

「は、はい!」

やったー! ついに、ついに手に入る!!

「その、なんだ。すまん。無理」

な、なんですとー!?

「無理? 無理ってなんですか!？」

「む、言葉通りだが……」

「そりゃないでしょ!」

「無理なものは無理だ」

「で、でもなんでもい言ってたじゃないですか!」

「だから、謝ってるだろ」

「そんな」

「かわりに今度飯でもおごってやるから許してくれ」

「そのぐらいしてもらわないと割りに合いませんよ!」

……っは! 俺は今とんでもない約束をしなかったか!?
河浦
父と飯に行く!? 無理無理無理!!

「あの…、いまから断ることは…?」

「却下。俺もお前とゆっくり話をしたいと思っていただけからちょうどいい機会だ」

「…わかりました」

「うむ、それじゃ後日向かえに行く。今日はもう帰っていいぞ」

結局聖地に行く気にならなかった家で帰った。そして寝た。

ZZZ…。

うん、あれだ。や○ぎの人には常識は通じないんだな。

後日ってその日には行かないってことだよな！？ 俺間違っ
てないよな！？ って言うかなんでまた寝ているあいだに連れ出すの！
？ これって拉致だよ！！ 我が家のセキュリティはどうなっ
てるんだ！！

しかも迎えにきたの高橋さんだし……。き、気まずい……。

「あの〜、その、鼻大丈夫ですか？」

彼の鼻はなんとも大きな絆創膏がはられているのだ。原因は…聞
くな！

「ええ、少々息がしにくいですが問題ありません」

うん、嫌味が言えるなら大丈夫だろう！

「それよりも今晚外で食事をして大丈夫なのでしょうか？」

……いまさらかよ！ まあでも

「へーきでしょ。基本うち家族全員で食べるほうが珍しいから」

「そう、ですか。すみません」

「べつに気にしてないよ。あといまさらだけど敬語使わないでいい
？」

「ええ、かまいません」

「うん、あと高橋さんも敬語なんて使わないでいいから、こんな子供相手にさ」

「そうですか。なら遠慮なく」

「ああ、そうしてくれ」

「ごほん、いいか。一つ忠告しておくぞ？」

おっ、さっそく敬語が抜けたな。しかし……かなり厳しい口調だな、おい。

「今夜の食事には隆一郎様も来るが絶対に手だすんじゃねえぞ!？」

……は？ なに河浦父だけじゃなかったの？

「悪いけど俺は女の子にしか興味ないから」

しかし河浦君が来るとめんどくさいことになりそうだな…。

「あつ、そういえばなに食べに行くの？」

「ちっ、そんなことも知らないのかよ」

うん、あれだ。高橋さんは二重人格なんだな。闇高橋と命名しよう!—!

「寿司だよ、寿司」

「それって回ったりする？」

「ああ？ 寿司がなんで回るんだよ！？」

「回転寿司を知らないのか！？」

「なんだ、それは？」

「まぢか…、回転寿司を知らない奴がいたとは…。

「寿司が回転するのか？ 食えないじゃないか…」

「な、なにを考えているんだ、この人は…。

「寿司が乗っている皿がレールに乗って回っているんだよ。寿司が回転しているわけじゃないぞ」

「イメージがでкин…」

「今度連れっけてやるうか？ もち、割り勘だけど」

「ほ、本当か！？」

「あ、ああ」

「そんなに嬉しいそうにされると照れるな。」

数分後河浦君、河浦父といかしたスキンヘッド数個が待つ寿司屋についた。

で、でかい……。多分もう二度と来ることはないんだろうな……。

「おお、来たか。さつさと座れ」

席には河浦父、河浦君、高橋さんと俺。いかしたスキンヘッド達は店の前と車の前に立っているらしい。……店の前に立っていたら営業妨害になるんじゃないの？

「さつさと注文しろ」

「はい」

河浦父に話しかけられるのも慣れてしまった自分が憎い……。頼んだ料理がくるまで世間話をして時間を潰した。

第十五話

さて皆さん、こんにちは。私は小須田愁作です。え、誰だって？
ははは、いやだな、皆さん覚えてるでしょ、僕のこと。そこ覚えてないとか言わない！！

……、まあなんだ。僕、出番少ないから忘れられても仕方ないよね……。

そんな可哀相な僕とその他もろもろを思い出してもらったために人物紹介をします！ 決定！！ パチパチパチ！！

山木司

高校三年生。見た目には特に特徴はない。強いて言うなら両頬にあるエクボだな。

中学校のときは中二ワールドの山木、略してチュウワの山木と呼ばれていた。まあ、いまでも一部ではそう呼ばれてるみたいだが。

河浦一家の頭、総一郎の子供の隆一郎君に愛の告白をされてから彼の日常は変わる。っていうか変わり初めている。特に人間関係が。

河浦隆一郎

高校二年生。チョーがつくほどの美形。山木君のことを好きになり告白するが、あまりと言うか、全く隆一郎君のことを知らないから何とも言えないと言われる。

そして、山木君に猛烈なアタックを仕掛けるがやりすぎて山木君を怒らせ、自殺を図る。まあ、自殺は失敗に終わったけどね。もし、死んじゃったら僕も山木君も総一郎に殺されてるよ、ははは。

田沼和人。趣味は盗撮。うん、普通に犯罪だな。まあ、いいや。あと、こいつのことで分かっているのは、情報屋ってことと、高校三年生ってことだけ。あとは……、銀髪でちょっぴりイケメンってことかな。

田中裕子

高校二年生。隆一郎君と同じクラスで、隆一郎君に密かに(?)恋している少女。

見た目の特徴は胸がでかい。性格は猪突猛進。終わり。え、短いつて? だって僕彼女と会ったことないもん。はい、次行ってみよ〜!

河浦総一郎

隆一郎君の父。息子とは違う感じのイケメン。や○ざやってる危ない人。本人は気付いてないが親バカ。田沼を雇って隆一郎君の学校での様子を得ている。隆一郎君が生まれると共に妻を亡くす。

高橋

下の名前は不明。いや、マジで。文句は僕じゃなくて作者に言うて!

隆一郎君の世話係で自分の子供のように隆一郎君を思っている。その思いが強すぎて山木君に喧嘩を売るが負ける。

小須田愁作

さあさあ、ついに来ました！！ 待つてないとかいわないよ、その君！！

職業（闇）医者。なかなかの男前。ホントだよ！？

総一郎とは長い付き合い。だから呼び捨てでも文句言われない。

隆一郎君の掛かり付けの医者みたいなもんだな、きっと。家業が家業なだけに普通の病院には行けないみたいだな。まあ、僕も人のこと言えないけどね。無免許でも腕は良いんだよ！？ ホントだよ！！

いかしたスキンヘッド

河浦一家に居る人達の総称。もちろんフサフサの人もいるよ。ただなぜかハゲもとい、いかしたスキンヘッドが多いんだよね。

山木母

第一話の最後のほうにてできた伝説のお人。もしかしたらまたてでくるかもしれません！（by作者）

これで人物紹介は終わり。皆さん思い出したかな？ これから先どうなるかは作者の気分しだい！ って感じだけどこれからよる

しくねー！！

P S ・ もっ僕のこと忘れないでね) ・ ^
| ^
A

第十五話（後書き）

誤字脱字などがありましたら教えてください

感想、アドバイスなどありました教えてください

第十六話

さてさて、俺は生まれて初めてピカピカ光るほど新鮮なお寿司様達を見て、食べさせてもらったわけですよ！ めちゃくちゃ美味しかった！！

今まで食べていたのと同じ料理とは思えないほどに！！

ただ今はそんなことを言っている場合じゃないんだな……。なんでだつて？ 理由は簡単、河浦親子が喧嘩してるんですよ……。口論じゃなくてガチの殴りあいを店の中で……。せめて表でやろうよ……。しかも喧嘩の理由が河浦君が最後に食べようと思つて、とつておいたイクラを河浦父が食べてしまったからだ……。どんだけだよ……。

「父さん！ なんであなたはいつも！！」

わお！ 河浦君が父親にそんな口を聞くなんて！！

「いつもなんだつてんだ！？ ああ！？」

ホンマのや○ぎ怒鳴ると迫力がハンパないな！！

「僕はあるたのそついう無神経なところが嫌いなんだよ！！」

「はっ！ 知るかよ！ 俺は生まれつきこついう性格なんだよ！！」

なんて言つか…子供だな。

「しるわこつ…！！」

喧嘩の理由も話してる内容も、ものすごくくだらないけど二人ともものすごく強い…！ これを見せ物にしたらしい商売に…。

「山木さん」

「うおおっ!？」

「失礼しました。すこしいいですか？」

「ん、ああ。でも高橋さん、敬語つかわないでいいって言ったじゃん」

「総一郎様の前ではさすがに…」

「ああ。で、なに?」

「いえ、さすがにこれ以上続けられますと弁償代がシャレにならないになるので、そろそろ止めてほしいんですよ」

たしかにな…。テーブルはほぼ全て倒れてるし、椅子にいたっては武器として使われたり投げられたり…。壁は投げられた椅子が当たってビビがはいったり…。

「でもどうやって止めんのさ?」

「あなたがお二人を叩きのめせばいいのでは?」

「いやいや、無理でしょ!」

「つか、雇い主を叩きのめさせて…。いいのかよ?」

「そうですね？ あなたならできそうな気もしなくもないですけど…」

アホかこの人は！？

「ふうー、しかたないですね。奥の手を使いますか」

あるんなら最初から使えよ！！

「総一郎様、隆一郎様。そろそろ止めてくれませんか？」

「いやだ！ 今日こそこの無神経バカに思い知らせてやるんだ！！」

「やってみやがれ！！」

よけいに激しくなるとるやん！！

「隆一郎様。実はここに一枚の写真があるんですか…」

「ま、まさか…」

まさか？

「つい先日隆一郎様のベッドを直しにいったとき、不思議なことに黄色いシミが…」

「うわあああっつー！！」

「ははは、お前まだやってんのかよ！！」

河浦君のイメージが…。

「総一郎様。実はここに一枚の写真があるんですか…」

「ま、まさか…」

まさか？

「ダンスに小指をぶつけて泣いてうずくまっているときの…」

「うわあああっつ！！」

「で、止めてくれますか？」

「はい………」

闇高橋だ……。闇高橋に敵はいないのか！？

「さて、お二人も大人しくなったことですし帰りますか？」

「はい」「はい」

三人仲良く返事をして今日はお開きになった。

はあ、なんか疲れた…。そういえば明日学校だよ……。朝起きれるかな？まあ、遅刻してもいいかっ！

第十七話

さてさて、俺は今日久しぶりに我が家で目を覚ました。
うん、やっぱり朝は自分のお部屋での起床に限りますな！

そんなことを考えながら学校に行く用意をしている。

こんこん

ドアの叩く音が部屋に響く。誰だ？

…まあ、俺の部屋に来るのなんてお母様しかいないよね。

「司くん、入るわよ」

入ってるから…。入ってますから……。

そういうことは入る前に聞いてくださいな。

「で、なんなのさ？」

「ん〜、ちょっと気になることがあるのよ〜。

「なにさ？ 成績はそこまで悪くないはずだけど？」

「ん〜、成績なんてどうでもいいのよ〜」

なんて親だ……。

「最近あんた変な人たちと関わってるじゃない？ それがちよ〜

「と心配でね」

まあ、確かにや○ざさんが家に入り出るようになれば、いくら我が家のお母様でも心配になりますよね。

「ん、まあ気にしないでいいよ。あの人は別に悪い人たち……だけどダイジョブだよ、きっと……」

「え、そうなの。ん、まあそれならいつか!」

……あいかわらず適当だな。つか、いいのかよ!? ……まあ、いつか。

「んじゃ、学校行ってきます」

「はい。行ってらっしゃい。ばいばい」

ゆるいな。

「よう、田沼」

「おう」

「昨日さ、河浦君たちと夕飯食べにいったんだけどさ」「聞いた、高橋さんから」

「そうそう、高橋さんが闇化してさ」

「闇化！？」

「そうなんだよ。高橋さんって絶対腹黒だよ！」

「まあ、だろうな。俺もそう思ってたし……」

そんなこんなで教室に到達。

「おい、皆すわれー！」

ホームルームの始まり始まり……。さあ、寝よう。おやすみZZZZ
……。

「やーまーきー！ 私の授業はちゃんと聞けってんだろー！」

「俺の眠りを妨げるヤツは何人たりとも……許さん！！」

「黙れ！！ 私の授業を聞かんヤツは何人たりとも許さん！！」

「……」
「H A H A H A H A」
「……」

「おまえらも黙れ！」

なんなんだ？？ 時計を見るとちょうど三時間目が始まる時刻だ。今日の三時間目は……英語か？ 英語だな。目の前にこのミスターバ
ーカが居るんだから。

「おい、いま失礼なことを考えていただろ!？」

「イエイエ。ソナナコトアリマセヨ、ミスター」

「うそつけ! あと私は女だからミスだ!! まあいい。授業始めるぞ〜!!!」

ふう〜、この時間は起きてなきゃいけないのか…。

「教科書57ページを開け〜」

ミスターもといこのミスは名前なんだっけ? えーと、えーと思
い出せない……。なんだっけ?

キーンコーンカーンコーン

「終わったー!!!」

さて、飯にしよう。なに食べよう? まあとりあえずは田沼でも
誘って購買に行こ。

「飯? いいけど外でいいか? 小須田先生と食う約束してるんだ
よ」

「小須田先生? まあいいけど、うちの学校って外食なしじゃなか
ったっけ?」

「んなもん無視だ無視！ もし見つかったも俺に任せろ」
任せろって…。

「人間やましいことの二つや三つやってんだよ」
なるほど。

「で、どこにいくんだ？」

「ああ、ティナ食堂ってとこだ。知ってるか？」

「なにそれ？ なんかすんごく危ない名前だな、おい」

「まあそういうな。けっこう美味いから」

そんなこんなでティナ食堂。

「やあやあ田沼君。待ってたよ。おや、山木君もいるのか？」

「ああ、別にいいだろ？」

「あ、いや、そのなんだ」

「なんだ、俺のコレクションを見るのがそんなに恥ずかしいのか？」

コレクション？

「ま、まあまずは料理を頼もうじゃないか」

「そうだな」

メニューは……ティナのぶっかけ丼にティナのメンソーレ？ さらにはティナのコマネチ！？

「なんだよこのメニューは！？」

「ああ、大丈夫だよ。名前は変だけど味は美味しいから」

結局メニュー表とにらめっこしても料理が浮かんでこなかったの
でティナ好みなるものを注文した。

出てきたのはソースでティナLOVEとかかれたバカでかいお好み焼きだった。うん、めちゃくちゃ美味い。ふざけた名前だったけど。

「さて本題に入ろうか。俺達は午後の授業があるからな」

そう言って田沼が出したのは紙袋。それを逆さまにするとバツサバツサ落ちてくる写真。バサバサではバツサバツサだ。

「お、お前これって……」

「俺のコレクション」

盗撮写真じゃねーかよ！ しかもうちの学校の……！

「いやー、いつみても君の写真のときは素晴らしいね！」

小須田先生……、いつもって……。

「さてようもすんだし、俺達はそろそろ学校に戻るぞ」

「……あぁ」

今日見たことは忘れよう。うん、それが一番いい。

アンケート

いくつか質問があります。

Q1・川浦君と山木君の関係

え、質問の意味はですね、河浦君と山木君をもっと接触ていじくさせたほうがいいのかどうかです。最近、読み返して河浦君と山木君ぜんぜん近づいてねーじゃん！ と思ったので皆さんもそう思ってるんじゃないでしょうか？

Q2・キャラ

はい、意味わかんないですね。説明します。これも読み直したときに思ったことですが、女キャラが少ない！ 実際今いるのは、田中さんと山木君のお母様、あとは謎の女教師だけです。まあ、女キャラだけではなく、男キャラでこんなのだしてほしい！ というのがありましたら教えてください。

Q3・一話の長さ

名前の通りです。一話一話をもっと長くしてほしいとか、このままでいいとかありましたら教えてください。

以上の三個の質問に答えてもらえるとものすごく助かります。

あと、今月はAO入試の関係で更新できないと思います…。来月は絶対更新するので見捨てないでください……。

アンケート（後書き）

答えは感想に書いてください。お願いいたします m () m

第十八話

さてさて、昨日は小須田先生の意外な一面を発見してしまったが、そんなことは毎日起きることはなく今日は平穏な1日……というわけにはいかないようだ。

俺は今屋上に来ている。目の前には落ち着かない様子の河浦君。そして、扉からこちらをにやにやしながら覗き見ている変態田沼がいる。……なんかすごく嫌な予感がする。

「で、なんの用かな？」

「や、山木先輩……！」

「どじしたの？」

「あ、あのですね！ その……そのですね……！」

「なに？」

……なんか嫌な予感がする。

「じ、今度の日曜日にですね……！」

「日曜日に？」

「日曜日にですね！ ぼ、ぼぼぼ僕とで……じゃなくて一緒に柚木ランドに行きませんか……！」

「柚木ランド？ ああ、あのテーマパークみたいなのか」

「は、はい！」

「ん、まあ、いいよ」

「ほ、ほんとうですか！？ や、やったー！！」

「あ、ああ」

「こ、今度の日曜日に駅で十時です！」

「お、おう」

それだけ言うと川浦君は走って行ってしまった。

まあ、普通の用件だったな。……デートとか言いかけたのを除いてな。

「はあ、教室に戻るか……」

つーか、田沼はどこに行ったんだ？ まあいつか。

教室に行くと、パソコンをなぜか俺の席でイジっている変態田沼を発見した。

「おい、そこの変態。俺の席でなにをしている？」

「ん、なんでもねえよ。それよりも川浦君とはどうなった？」

「いや、今度の日曜日に川浦君と柚木ランドに行くことになったんだよ」

「ふうん、まあ楽しめよ」

他人事だと思いやがつて!!

まあ、そこまで変な用件じゃないからいいけどさ。

「ん、じゃそろそろ俺は席に戻るよ」

「おう」

さて、授業も始まるし昼寝とするか。おやすみZZZZ……。。

第十八話（後書き）

久しぶりの投稿で変な感じになってたかも知れませんが。しかも短く
てすいませんm（――）m

第十九話

さてさて、今日は川浦君と約束した日曜日の十時。俺は今俺の家の部屋にいる。

うん、つまり寝坊だ。

今から駅に行っても十分はかかるしな。どうせ遅刻なんだからゆっくり行くことにしよう。人間くずだと思った君は表に出なさい。

「ごめんごめん、遅れて！」

「い、いえ！ ぼぼぼ僕も今来たところです！」

「そ、そう」

絶対嘘だな……。一時間ぐらい前に来てるな、きつと。

「んじゃ、行きましようか？」

「はい！」

そんなこんなで袖木ランド。

うん、休日のテーマパークってだけであって子連れやカップルが

いっぱいいるな。

……浮いてるな、俺ら。男二人で休日にテーマパーク。しかも連
れは超がつくほどのイケメン。そりゃもう、女性という女性が俺の
ことを睨んできます。なぜ俺が睨まれなければならないのでしょうか？
理由は簡単。彼女達は俺が川浦君の恋人だと思っているのだ
ろう。この腐女子共が！！

「なんで皆、僕たちを見ているんでしょうか？」

「そ、それはだな……」

い、言えない……。口が裂けても言えないぞ、俺がさっき思ってい
たことなんかを言ったら川浦君は発狂すぞ。嬉しくて！

「まあ、いいじゃないか！ それよりも飯にしないか？ そろそろ
いい時間だろ」

「そうですね。どこで食べましょうか？」

どこでっていわれても、ほとんどジャンクフードしかないんだけ
どね……。河浦君はジャンクフード食べたことあんのかな？

「なあ、河浦君はハンバーガーとか食べたことあんの？」

「もちろんありますよ」

「じゃ、ハンバーガーでいいか……」

ということが無難にハンバーガーを食べることにした。

さあさあハンバーガーがきましたよ！ 朝からなにも食べてないから腹ペコなんだよ！！ まあ、ハンバーガーなんてへビーなものだけだな……。

……………？

「どした？ 食べないの？」

「い、いえ。ナイフとフォークがないので、どうすればいいのかわからなくて……」

……………はい？ ナイフとフォーク？ んなもん要らんでしょ。

「いやいや、手でつかんで食べるものでしょ、ハンバーガーって」

「そ、そうなんですか!？」

さ、さすがや○ぎの息子。まさかハンバーガーをナイフとフォークで食べるとは……。つーか、どれだけ高価なハンバーガー食ってんだよ!？

「まあいい。それより、どこか行きたいとことかあんの？」

「えつとですね。僕、ジェットコースターに乗ってみたいです!！」

「ジェットコースター？」

「はい!！」

め、目が輝いている……。まさか、乗ったことがないと言わないよな……。

「なあ、まさか乗ったことないとか言わないよな？」

「な、なぜわかったんですか!？」

「……………」

「山木先輩？ どうしました？」

「いや、なんでもない……」

この日、俺は河浦君とジェットコースター、お化け屋敷、メリーゴーランドに乗った。……メリーゴーランドはさすがに恥ずかしかった。しかも、すべて河浦君は初めて乗ったみたいですよ。いはいはしいでたし……。

「じゃ、そろそろ帰えろっか？ 明日も学校だし」

「や、山木先輩！ そ、そろそろあの時の答えを教えてください！
」！

……やっぱりそれ聞くのね。どうしよ……、前回みたいにはいかなうだろうしな……。ちゃんと答えるべきだな……。

「河浦君。俺は君のことを……………」

第十九話（後書き）

次話に続きます。

第二十話

さてさて、どうしたものか……。まったく考えてないわけではな
いがやはり困るな……。でもやっぱり……。

「川浦君、俺は君のことを好きだと思う。でも、それはやっぱり友
達としてであって、恋愛対象としてはやっぱり見れない」

「……………」

「それでもいいんならこれからも仲良くしていきたい。これが君の問
いに対する俺の答えだ」

……………あれ？ 泣き騒ぐかと思ってたけど意外と静かだな。

川浦君は俺に向かって静かに笑っていた。

「……………いいのか、それで？」

「はい。それで十分です」

「そ、そうか」

……………それならなにも言わないでいいか。

「それじゃ、失礼します」

そう言って川浦君は走って帰ってしまった。

……………俺も帰るとするか。

……ふられっちゃたな。どうしよう、山木先輩に会いにくくな
っちゃたよ……。でもしょうがないよね、自業自得だよね……。

「うああああっ!！」

今日久しぶりに大声を出して泣いた。多分、父さんや高橋さんに
も聞こえてるだろう。でも今日は気にしない。気が済むまで泣き叫
ぼう。それで明日は普通に山木先輩と話そう。多分山木先輩はなに
もなかったように接してくれるだろうから……。

第二十一話

さてさて、俺はいま河浦父の前に座っている。しかも、俺の後ろには魔王もビビりそうな顔でこちらを見ている高橋さんがいるし……。

「で、俺は今日なんで拉致されたんですか？」

「おいおい、拉致とか言うよ。知らない人が聞いたら誤解するだろ」

「知らない奴が入るほどあなたの家のセキュリティはやわなんですか？」

「くくく、相変わらず面白い奴だな」

「そいつはどうも。で、なんで俺はここに呼ばれたんです？」

「さあ、なんでだろうな？」

「そうなんですか、なら俺は帰らせてもらいますね」

「お、おい！ 悪かったってー！」

「さっさと話してくださいよ。俺、今日学校なんですから……」

「わ、わあったよ」

っほ、どっちにして後ろにいる高橋さんの顔が怖すぎて帰るに帰れないんだけどね……。

「じゃあ本題に入るが、昨日隆一郎が昨日泣いていた訳を教えてくださいおっ」

田沼から聞いてないのかよ？ まあいいか……。

「で、なんでなんですか？」

うおわあっ！ びっくりした！！

「高橋さん、いきなり話しかけないでください……。心臓が爆発しそうでしたよ……」

「貴方の心臓がそんなやわなはずないでしょう」

「……まあ、それは置いて。実は昨日こんなことがありまして……」

俺は昨日あったことを包み隠さずに全部話した。高橋さんの顔が怖かった……。

「なるほど……。で、それから隆一郎と会ったのか？」

「俺は昨日家に帰り、起きたら車の中。いつ川浦君に会えるのか教えてほしいですな」

「はいはい、そうだな。まったく口が達者なガキだな……」

「誉めてくれてありがとう。で、俺は帰っていいんですか？」

「ん〜、高橋はなんか言うことあんのか？」

「一つだけあります。山木さん、貴方は私との約束を破りましたね」

約束？ なんの話だ？

「隆一郎様を今度また泣かしたら殺す、と言いましたよね？」

……はい、言ってみましたね。

「ということで死んでください」

そう言ってナイフを取り出しこっちに来る高橋さん。……ちよつと待てー！！ 俺、今マジで命の危険にさらされてませんか！？

「ちよつ、ちよつと待てよ！ は、話そう！！ 人間の口は話すためにあるんだからよ！！」

「いいえ、人間の口は食べるためにあるんです」

知らねーよ！！

「俺は両方のためだと思いがな」

うるせーよ！ あんたは高橋さんを説得するの手伝うべきだろ！！

「ちよつ、マジで少し落ち着けよ！」

「私は常に冷静です」

だあー、もう!!

「河浦父さん、これ借りるよ!!」

「おう!!」

そうやって俺は立てかけてあつた日本刀を手を取つた。……これ
つて河浦父が昔、俺の首に向けていたのじゃね?

「貴方は刀を扱つたことあるのですか? 初心者がそんなものを振
り回すと火傷しますよ?」

「心配無用!!」

まあ、そうは言つても刀なんか使つたことないんだけどね。鞘か
らださなきゃダイジョブでしょ、きつと。

よし、こつからが本番だ!

「はい! そこまでっ!!」

……だれ?

第二十二話

さてさて、声が聞こえた方を見てみると綺麗な顔の人が立っていた。……え〜とこの人綺麗な顔してるけど男だよな？ でも、なんでスカートなんかを履いてらっしゃるんでしょうか……？

「あ〜、貴方さんは変態さんですか？」

「し、失礼な！！ 私は少し女装癖があるだけの普通の人間です！！」

それを世の中だと変態と呼ぶはずなのだが……。

「ま、まあ私のことは置いといて……。まずは二人とも武器を置いてください」

言われた通り俺と高橋さんは武器を床に置いた。

「で、なにがどうなったらこんなことになったのか教えてくださいますね、総一郎さん？」

「う、うむ……」

どうやら河浦父はこの女性（？）のことが苦手のような……。

「これは高橋が暴走したんだよ！ 俺のせいじゃねーよ……！」

「総一郎様、あんまりです」

うん、確かに今のはないよな……。

「本当のことを言ってください!」

「俺が話しますよ」

「……貴方は?」

「ああ、俺は山木司です」

「ああ、貴方が山木君ですか……。噂はよく聞いてます」

「どんな噂か気になりますね……。まあ、それよりも……」

俺が話をしている間変態さんの顔がだんだんと般若となつていったのはご愛嬌だ。

「ほお、つまり総一郎様は全く止めずに観戦してらしたけですか?」

「ま、まあそうなるな」

「まったく! また高橋さんを笑い者にしたかったんですか!」

「……笑い者?」

「どづいづいことですか?」

「どつもどつもや○ざの家の者がそこらの高校生に喧嘩で負けたんだからそりゃ皆笑いますよ」

「……高橋さん、なんかごめん……」

「いえ、こんな若造に負けた私が悪いんですから」

「……嫌味が言えるんだから大丈夫だよな!？」

「林田、ここに来た訳をさっさと言え。まさか、高橋と山木の喧嘩を止めにきただけじゃねえよな?」

「田沼さんから連絡がありました……」

「あつ、俺帰りますね。なんかややこしい話になってきたみたいなんだ」

「いや、まだ話すことがあるからまだいてくれ」

「……マジですか?」

「では、話を進めますね。」

俺に関係していないことを密かに祈ることにしよう……。

「さっき田沼さんから電話がありました、山木さんがいましたら至急学校に来るように伝えてください、とのことですよ」

「……それだけか?」

「はい、そうです」

「……わかった。下がっていいぞ」

「失礼します」

控え目に頭を下げて変態さんは部屋から出て行った。

「つーわけだからさっさと学校に行け」

「話つてのはまったく同じ内容だったんですか？」

「そつだ。高橋、こいつを学校に送ってやれ」

「分かりました」

「よ、よろしくお願いします……」

車の中で殺されないことを祈ることにしよう……。。

第二十二話（後書き）

いきなりですが中二病と同性愛を終わらせようと思います。

え、自分は受験生なので一応ですが勉強と言っものをしているわけで、受験が終わるまで凍結させるか完結させるかで悩んだんですが、完結させることにしました。

あと数話で終わらせる予定なのであと少しお付き合いお願いします。

第二十三話

さて、今日もいい天気ですしはりつきって頑張るとしますか！
あつ、申し遅れました。僕、小須田周作です。カリスマ（闇）医者
でイケメンの小須田です。

実はここ数日総一郎に頼まれて学校の保健室で働いている。とい
うのも、最近河浦一家となかの悪い阿部一家がこの学校のことをこ
そこそ調べているとのこと念のため僕を送りこんだそうだ。…僕
医者だし、河浦一家の者でもないんだけどね……。

「はあ、なんで僕が……」

ひ・ま・だー！！ はい、暇です。やることはない……。うん、
あれだ。田沼君のとこ行って新しい写真たちを貰おう。そうしよう。

仕事？ まあ、なんとかなるでしょ。

ということで、田沼君の教室の前に来た。んじゃ田沼君を呼びま
すか。

「失礼、田沼君はいるかな？」

「おお、小須田先生か。ちょうどいい。皆、保健室に移動するぞ！」

えっ？ なに？ なんで？

「小須田先生、早く！！！」

「はいっ！」

……状況がまったくわからないまま保健室に戻って来ました。なぜか山木君と隆一郎君も一緒に来てるし……。

「で、田沼。なんのようだ？」

「部長、お前が数日前ボコツた奴が阿部一家っていうや○ぎの一家の奴でな、腹いせに田中さんを拉致ったんだよ」

「……はい？」

「だから！ お前のせいで田中さんがや○ぎに拉致られたってこと……！」

「えっ、やばくない!？」

「そう！ だから、こうやって戦える奴を集めたんだよ!！」

「なるほど！ で、作戦は？」

……なんでこの子達はケーサツに行くという手段を思いつかないのか不思議だ。まあ、ケーサツなんか来たら僕が捕まっちゃうんだけどね！ あっ、あと田沼君も捕まるし、隆一郎君も危ないか!！
……犯罪者多っ!！

「……小須田先生？ 真面目な話をしてるからそんな面白い顔をしてないでくるか？」

「あつ、ああ」

そんな変な顔してたのかな？

「で、作戦だか……ズバリ正面突破だ！！」

……それ作戦じゃないよ。

「おう！」

「田沼先輩……」

「なんだ、隆一郎君？」

「僕は行けません」

「なぜ？」

「僕は僕である前に河浦一家の一人息子です。その僕が行くと全面戦争になる可能性が……」

「……」

「わかった。河浦君はここに残っていいよ。もともと俺のせいだしな」

ふーん、山木君は優しいな。……でも、わかってないな。

「……ありがとうございます」

「んじゃ、田沼！　いくぞ！！」

「おう！！」

そう言って二人の少年は学校を後にした。

「隆一郎君、君は本当に行かないでいいのかい？」

「だから、僕が行くと全面戦争に……！」

ふうー、まったくこの子は……。

「いいかい、隆一郎君。子供ってのはね、自分の感情に任せて行動できる唯一の時間なんだよ？」

「でも、僕は他の人と背負ってる物が違う！」

「……いいかい？　君は思いどおりにやった後のことなんて考えなくていいんだ。後のことは親の総一郎がなんとかしてくれる。奴一人で無理だったら、高橋が林田が僕が手を貸してやる。だから、行きなさい。大切な人達なんだろう？　なら、迷うな！　自分の感情に任せて行動しろ！」

言い終わると同時に隆一郎君は走って保健室を後にした。

うん、これでいい。さあ、僕もやることやるか！　主に後片付けと総一郎の説教になりそうだけど……。

第二十四話

僕は小須田先生のいる保健室を後にして、下駄箱に向かって走っている。

早く、早く山木先輩たちのところに行かないと……！！

はあはあ、下駄箱までがすごく長く感じる。

……？

下駄箱の紙きれが入ってる。

『川崎倉庫 三番倉庫』

山木先輩の字だ……！！

先輩たちは僕が来ると信じてくれていたんだ！
なのに、なのに僕は……！！

さてさて、俺は今、田沼と田中さんが監禁？
軟禁？
されているという川崎倉庫に向かっている。

……やっぱ気になるな。

「なあ、田沼ちよつと聞きたいことたいことがあるんだけど……」

「今じゃなきやダメなのか」

「ああ、二つあるんだが……。一つ目は田中さんを拉致った奴のことだ。俺が最近ボコった奴だって言ってたけど、俺は最近アキバに行っていないから誰もボコっていないと思うんだけど……」

「ああそのことか。お前が一月ぐらい前、もっと言えば川浦君のことを力モにしようとしてた奴だよ」

「……つまり河浦君にしたらそいつが恋のキューピッドってことか」

「まあ、そうなるな」

……最悪だな、おい。

「でなんで、お前が田中さんが拉致られたことを知っているんだ？」

「向こうから俺にさっき連絡があったんだよ！ 返して欲しかったら川崎倉庫に来てな！！」

「……なぜ、お前に連絡したのか気になるが聞かないことにしよう」

「そのほうがいい」

まっ、思ってた通りの答えだな。まあ今さらこいつがなにやってようと驚かないがな。

「着いたぞ！　あとは三番倉庫を捜すだけだ！！」

……やっぱな。

「まて、5分だけ待たせてくれ」

「待つつて誰をだよ？」

「河浦君に決まってるんだろ？」

「……5分だけだぞ」

「ああ、わかってるさ」

「はあはあ、あと少し！！」

もうすぐ川崎倉庫に着く！　早く山木先輩たちに追い付かないと
！！

「あそこだ！　……山木先輩！？」

「おう、やっと来たか！　とつと行くぞ！！」

やっぱり山木先輩は僕のことを信じてくれていたんだ……！！

「はい！」

「ちょっと待て！」

「なんだよ、部長！？」

「や、田沼お前喧嘩とできんのかなーって。いまからや○ぞと喧嘩なのに足手纏いはちよっとなって」

「んなことかよ。お前や隆一郎君ほどじゃないがそこそこ強いぞ？」

「そうか。んじゃ行くぞ！！」

「おう！！」

「はい！！」

最終話？（前書き）

え、本作品はラブコメなのを忘れずに読んでもらえると嬉しいです。

■最終話？

さてさて、俺、田沼、河浦君は田中さんが監禁(?)をされているといふ三番倉庫の前に来ているのだが……なんだか様子がおかしいのだ。どんなふうにおかしいかというと

「ちょっと！ さつさとコーラ持ってきなさいよ！！」

とか

「ねえ！ マンガは！？ さつさと買ってきなさいよ！！」

と田中さんが怒鳴っているのだ。……おかしくね？ フツー、助けてー！ とかいう声が聞こえてくるはずだよな？ 俺間違っただけだよ！？

「おい、田沼。本当に田中さんは拉致られてんのか？ 声を聞く限りじゃ田中さんがあいつらをパシリにしているようにしか聞こえないんだが……」

「ああ、俺もそう思ったところだ。ここで考えてもしょーがねーから俺達もさつさと入るぞ！」

「俺達も？ あれ、河浦君は？」

「もう入ってるぞ」

マジでー！？

入ってみるとそこはパラダイスでした。田中さんにとっては。

女王様は真つ赤なソファーに座り、下僕A、Bを踏みつけていました。そしてそれを見ている村人Aこと河浦君。

「……なにこれ？」

「さあな。ただ踏まれていれる左のほうが主犯だな」
「なんつーか、思ったより人が少なくないか？」

「ああ、確かにな。ほんとに阿部一家がからんでいるのか？」

「だろ？」

「つーか、主犯が踏まれてるって……」。

「なあ田中さん。お楽しみのもとこ悪いんだけど色々聞きたいことがあるんだけど……」

「べ、別に楽しんでなんてないわよ！」

「いやいや、めっちゃ笑顔でしたから！！」

「田中さんはそいつらに拉致られたんじゃないのか？」

「拉致？ なにそれ。私はただちょっと薬嗅かされてここに連れてこられただけよ」

「……それを世間では拉致とか誘拐と言っんですよ。」

「まあ、それはいい。とりあえずその二人に話があるから足をど

けてくれないか？」

ナイスだ、田沼！ これでやっと話が進むぜ！！

「え、あつ！ まだいたのこの変態ども！！」

いやいや、貴女も十分変態に見えますよ。笑顔で踏まれてる男どもを踏みつけてる時点で…。

「で、貴方たちはなぜ田中さんを誘拐したんですか？」

わお！ 河浦君直球ですか！！

「オメーラのせいだな！ 俺はな！ 俺はなー！！」

さっさと言えよ！

「ちょっと待て！ お前、阿部浩太郎じゃねか！？」

「ああ、そうさ！ でもな！！ そのガキのせいで勘当されっちまったんだよ！！」

……そのガキって俺のことだよな？ ええー！？ 完璧に逆恨みだよな、これ！？ はあ、こんなんばつかだよ、最近……。

「じゃ、田中さんも無事みたいだから帰ろっか」

「そうですね」

「だな」

「じゃ〜ね〜」

つーわけでなにをしたかったのかよく分からないまま泣き崩れている二人組みを置いて俺達は倉庫をあとにした。マジでなにがしたかったんだろ……。つーか、焦った俺らバカみてー。

「なあ、田沼。今のつて阿部一家の御曹司だったのか？」

「ああ、そつだ。聞いた限りじゃ勘当されたみたいがな」

……なんか後味悪いな。まっ、いいか。

「よし、皆無事なことだし皆でぱあ〜つとはしゃぎに行きますか！？」

「はい！」

「しゃーねーなー！」

「行ってあげるわ！ 感謝しなさい！！」

つーわけでこれから俺のちよつと変わった高校生活は続くようだな！ また機会があったらまた会おう！！

■最終話？（後書き）

今まで読んでくれてありがとうございます。 m () m

作者の一身上の事情（受験）により連載を終わらせてもらいます。
最後がいまいちなのは作者も重々承知しておりますゆえ、突っ込まないでもらえると嬉しい限りです。

受験が終わったら（3月ぐらい）になったら別の形で再開するたも
しれませんので、3月ぐらいになったら私のユーザーページをチエ
ックしてみてください。 m () m

長くなりましたが今まで読んでくれて本当にありがとうございます
た！ m () m

1話（前書き）

お久しぶりです。

結果はいまいちでしたが受験が終わったので再開します。

1話

さてさて、とくに何事もなく学校につき、何事もなく授業が始まった。

うん、なんか嫌な予感がするね。

こんなに普通だとこの後メンドクサイことがありそうだな……。

「よし、授業はここまで！」

お、授業が終わったか？

「よお、部長。今日の放課後あいてるか？」

出たよ、トラブルメーカー一号。あ、二号は川浦君で三号は田中さんね。ついでに言えば四号、五号は河浦父、高橋さんだ。

「暇じゃねーよ」

「そうか、暇か。じゃ、ちょっと付き合えよ」

「おい、話聞け！」

「あんだよ？ どうせ暇なんだろう？」

「つぐ、まあそうだけど……。」

「どこに行くんだよ？」

「ん〜、秘密。ま、変なところじゃないから心配すんなって

お前が一緒ってだけで俺の心配はなくならないんだがな。

「わあーたよ」

「んじゃ、逃げんなよ?」

そんなこんなで放課後。約束通り田沼に付き合っている。

「で、どこに行くんだよ? そろそろ教えるよな」

「ん〜まだ秘密」

「おい、帰るぞ?」

「わ、わかったから! 帰んなよ!」

「っち、マジで帰ろうと思ったのに。」

「向かってんのは映画館だよ、映画館」

「映画館? なんでそんなところに向かってんだよ?」

「ん? まあちょっと見たいのがあんだよ」

「……いつも違法サイトかなんかで見ているコイツが? 怪しい、怪しすぎる……。」

まあ、いいか……。

「で、なに見んだよ？」

「それは秘密」

「言えよ、減るもんじゃねーしょ」

「お、ついたついた。行くぞ〜」

「ちっ、おい待てよ！」

ん？ ……なんでトラブルメーカー二号と三号がいんだ？

「おい、田沼。なんでこの二人がいるんだ？」

「ん？ 言ってなかったか？」

「言っつてねーよ！」

「まあ、いいだろ。で、隆一郎君はなに見たいんだ？」

「えつと、あれです！」

河浦君が指差した先にあつたのは超純愛映画のポスターだった。内容は確かロミジュリみたいな感じだったよな。

……これって、恋人同士で見るモンだよな！？

「な、なあ川浦君？ 違うのにしない？」

「ちょっと！ いいじゃない！ 河浦君がそれがいいっていうんなら……！」

俺に発言権はないのね……。まあ、わかってたけどさ……。

「んじゃ、チケット買いにいくぞ〜！」

田沼を先頭にチケットを買いに列に並んだ。

1話（後書き）

感想書いてくれる嬉しいです！

一話（前書き）

むっちゃんくちゃん短いです……。

一話

さてさて、俺らは河浦くんが見たいと言った映画を見て（内容は予想通りでした……）、俺と田沼、河浦くんと田中さんで別行動になった。ちなみに河浦くんは無理やり田中さんに連れられて行ったかんがあったが。

「で、なんでここに来てるんだ？」

そう、いま俺はトラブルメーカー一号に連れられて、河浦家に来ていたりするのだ。しかも、なぜか河浦家はお誕生日パーティーのようなデコレーションがされているし。

「そりゃ、誕生日パーティーがあるからに決まってるんだろ」

「……誰の？」

「隆一郎くん」

「なんで俺がここにいるんだ？」

「祝うため」

「さっきの映画でよくね？」

「あれは前菜」

とか、なんとかかやっていると、周りが慌ただしくなってきた。

「皆さん、坊っちゃんが帰って来やした。準備を」

はげ、違う。いかしたスキンヘッドが一人入って来てそう言ってきた。

「準備ってなんだ？」

「ああ、これだ、これ」

渡されたのはクラッカー。あれだ、入ってきたときに鳴らせということだろう。

「ただいま」

「」「誕生日おめでとうございませう！」「」

河浦くんが入ってきた瞬間一斉にそっくりクラッカーを鳴らした。

……はつきり言ってるさ。てか、河浦くんの後ろに田中さんながいるし。

「み、みんな……。ありがとう！」

うん、あれだ。泣いてるな。

「河浦くん、おめでとう」

「せ、先輩……。ありがとうございませう！」

まあ、あれだ。今日も楽しみめばいいか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5399m/>

中二病患者と同性愛

2011年10月7日08時27分発行